



《1》

それは、どこにでもある大学ノートであった。何の変哲もないそれは、無造作にごみ袋に入れられて捨てられていたのであった。

遠藤が、それを燃やされる運命から拾い上げたのである。

この時期でなければ、そして、あの部下の名がノートの表紙に申し訳なさそうな小さな文字で書きこまれていなければ、そして、いつもの通りにこの場所が綺麗に整理されていればよかったものを――たまたま隊舎のごみ集積所からはみ出していたために、整然とできぬ部下らに説教すべく手にした袋を開けることもなかったであろう。しかしそれは確かに遠藤の視界に入り、彼の心を引き寄せたのであった。

今、そのノートは遠藤の手元にある。遠藤はシャワーを浴びて居室に戻り、隠してあった秘蔵のビールを取り出してのどを潤すと、ベッドに腰掛けてそのノートを開いた。

この時期――もうすぐ彼らは戦地に出発する身である。マスコミが騒ぎたてる中、先遣隊として――国民は日々の生活に忙しく、マスコミもやがては別の話題に流れていくことを見越して、政府は様々な言葉で彼らを飾り立てて白い霧へと彼らを隠し戦場へと送り出そうとしていた。金もなく力も衰え始めたこの国が払えるのは人の命だけであり、しかし、平和に慣れた国民が思考も行動も物資も制限される戦地でどの程度使い物になるのかなど、全くの未知数であった。

本格的な、そして国がある限り永続的な派遣は避けられないことであった。このため、どのようなことを整理しておくべきなのか、準備しておくべきなのか――そういったことを調べるために、ごく少数が試行として派遣されることになったのである。

その部隊が遠藤率いる中隊であった。なぜ己が選ばれたのか、などと遠藤は名を呼ばれた瞬間こそ驚愕の中で無数の反抗の言葉を並べたてたが、今ではすっかり身辺整理を終え、心は穏やかである。

自分が成功しようが失敗しようが、国が派遣をやめないことを悟ったからであった。そうであるならなおさら、遠藤は命を懸けてこの任務を遂行することを心に決めたのであった。後に続くであろう多くの仲間たちが、せめて少しでも整った環境で任務を、そして戦闘を――死を迎えることができるように道を切り拓くことが、彼の中での大儀であった。そのためならば、自分にもそして部下にも、死を強要できる、遠藤はそう一人で片づけたのである。

遠藤は居室で一人、濡れた髪から滴る水滴をそのままにして、拾ったノートと対峙している。白いページは蛍光灯の光をはじき、薄い鉛筆の文字をかき消さんばかりである。

そのノートの持ち主の名は、安原といった。

これほど無感情で無機質で、希望も持たずかといって絶望もなく悲嘆もない日記を遠藤は見ることがない。淡泊に事実のみを綴るそれを眺めながら、遠藤の胸中に安原という部下が、白い膜を張った世界の中で、銃を抱えて立ち尽くしていることに気が付いた。

見慣れた軍服に身を包み、ただそこに立つ安原がいるのである。遠藤が必死に整理ししがみ付く大義名分を踏みしめて、安原は立っているのであった。

《2》

安原という部下は、身長は高くもなく低くもない。体力も人より優れているわけでもないから、埋もれてしまえばそのまま埋もれたままになるような、徹底的に存在感のない兵士であった。遠藤もこのノートを見なければ、記憶に名前が残る程度の部下の一人で終わっていたであろう。

しかし、彼の日記は片付いた遠藤の心に闇を灯した。彼の脳内にかすかな不安の匂いを漂わせて離れなくなってしまったのである。

それは、日記に書かれていた的の穴であった。単調な記述で残された日々には特別に輝くものはない。それでも安原を持った助教は非常に細やかに、どんな起伏もなく思考もない日記に対して彼の文章より長い返答を書き込んでいる。その日の日記も何ら変わらない赤い色のボールペンの字で、射撃がうまかったらしい安原へのコメントが手短かに記されていた。

だが、遠藤には、その日が異質に浮かび上がっている。その日の記述だけ、事実以外のことが書かれていたからだ。銃を撃ったことも、射撃後にもらった的も事実であるが、ただ短くその事実に関わらず安原の疑問が、穏やかな水面に落とされた小石の波紋のように浮かび上がっているのだった。

倒れなかったのに、穴が開いていた――遠藤の脳裏から、見慣れた白い紙に書かれた人型に、撃ちこまれた複数の黒い穴がちらついて離れなくなってしまった。腹や頭を貫くそれは、どんな主張も伴わず、無言のまま黒々とした無数の目を彼に向けているのであった。

戦場へ送られるまでの間を、彼らは毎日毎日戦闘訓練に費やした。共に戦う予定である国の兵士と同じように投入される予定である彼らは、銃弾の音に慣れ人を殺すことに慣れねばならない。来る日も来る日も実弾の音に晒されて、そしてゲームをした。何人かは脱落したが、何人かはゲームを楽しみむしろそれを待ち望んだ。

楽しみとなっているそれは、撃った銃弾が敵の軍服を着せられた人形に当たると赤い色の塗料が飛び散り、人形が倒れる仕組みになっていた。ゲームは時折デジタルの波となって彼らに与えられ、ヘリボン作戦を体験し、市街地戦を経験し、上陸作戦をも体感した。

そのたびに、遠藤の脳裏に黒い穴が浮かんで彼の心を覗き込むのである。その目を潰そうとして、遠藤は引き金を引いたままにすることもあった。連射をすると銃弾がすぐなくなることを肌で感じ覚えるという言い訳を添えつつ、彼は無数の目を潰し続けた。

日報を書き終え語学演習も片付き、疲れた体で煙草を吸いに外に出た遠藤は、星が溢れんばかりの夜空の下、冷たく澄んだ空気を煙草の煙とともに肺に吸い込む。染み渡るほどに凍てついた空気は、淀んだ彼の胸の内に流れ込み、重たく沈むヘドロを追いやるかのようであった。これほど呼吸をすることがうまいということを、彼は今まで知らずに来た。生きていることに思いを巡らすのは、あの訓練のためなのか、それともいまだどこかであきらめきれない自分の人生への執着なのかと、遠藤は自問する。

その時、ふと遠藤は、彼等のために宛がわれた隊舎の下で、黒い塊が座っているのに気が付いた。よくよく目を凝らしてみると、それはあの安原であった。

彼が普段から戦闘服か作業服しか着ないということを、ここのところの観察で遠藤は知っている。この時も、ほとんどの兵士はジャージや短パンと思いつきの軽装でいるというのに、彼だ

けはモスグリーンの作業服を着、しかし足はサンダルという不思議な出で立ちで、半長靴を磨いているのであった。

遠藤が煙草をくわえて己を見ていることに、はたと気が付いた安原は、靴を拭く手を止めて、視線を遠藤に向けた。そしてしばらく己の中隊長を眺めていたが、どうやら遠藤のしているものが自分であるらしいと気が付いたのか、慌てて靴を置き、立ち上がった。

帽子のない安原は、頭を機敏に下げて敬礼した。日記の中の安原は新兵であったが、この安原は入隊からすでに数年が経ち、既に立派な下士官である。

それであるのに、靴は自身で磨き、どちらかという一人であることが多いことも遠藤は知っていた。

「ご苦労」

遠藤が煙草を放り捨て安原に手を振ると、安原は小さな声でお疲れ様です、と返答した。

「もう寝る準備か」

「そうです」

「風呂は入ったか」

「入りました」

安原は少しばかり緊張した面持ちで言葉を返す。隊舎から漏れる明かりの下で見るこの部下は、遠藤と一切視線を交錯させないでいる。

遠藤はゆったりとした動作で煙草を取り出した。軍人の仮面を被った彼は、安原への不安を、その鋼鉄の仮面の下へと隠して言う。

「お前、ノート捨てただろう」

「ノート、ですか」

「そう、新隊員の時に書いていたやつだ。あれは誰もがくぐってくるからだからな。見りゃわかる」

「確かに捨てました」

抑揚のない声だ。遠藤は煙草の煙を夜の闇空に吐き出した。

「なんで捨てたんだ」

「必要のないものは整理しろとのことでしたので捨てました」

「必要のないものか、あれ。思い出だろう。今までずっと捨てずにいたんだろう」

安原は小さく首をかしげ、遠藤を見る。

その目が突如、銃弾に突き破られた人型の穴に見え、遠藤は目を見張った。しかし、崩れかけた仮面を取り繕う上官の動揺に気が付かず、安原は感情をこめずに呟いた。

「整理をされていて出てきたので、捨てただけです」

それは、どんな思惑も隠蔽されていない声であった。